

生活科学習指導案における評価チェック法の開発

玉井恭平* 森田 綾** 湯地敏史*** 土屋貴代****
鎌田憲嗣***** 高橋洋子*****

Development of Evaluation Check Method about A Learning Teaching Plan in Living Environment Studies

Kyouhei TAMAI* Aya MORITA** Toshifumi YUJI***
Takayo TSUCHIYA**** Noritsugu KAMATA***** Yoko TAKAHASHI*****

1 はじめに

平成29年8月に報告された教員需要の減少期における教員養成・研修機能の強化に向けて「国立教員養成大学・学部、大学院、附属学校の改革に関する有識者会議報告書」では、教員養成学部と附属学校園の連携を重要視する中で、附属学校園における研究・実践の成果を把握し、教員養成カリキュラムの改善につなげることが现阶段では十分であるとは言えない。との指摘があった。平成22年3月に、「中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会」報告において「児童生徒の学習評価の在り方について」とりまとめられた。この中で、学習評価の改善に係る3つの基本的な考え方については、以下のように挙げられた。① 目標に準拠した評価による観点別学習状況の評価や評定の着実な実施、② 学力の重要な要素を示した新学習指導要領等の趣旨の反映、③ 学校や設置者の創意工夫を生かす現場主義を重視した学習評価の推進、である。これまでの学習評価については、児童の「生きる力」の育成を目指し、児童一人一人の資質や能力をより確かに育むようにするため、指導要領に示す目標に照らしてその実現状況を的確に把握し、学習指導の改善に生かすことが重要であった。現状の観点別学習状況の評価は、「関心・意欲・態度」、「思考・判断・表現」、「技能」及び「知識・理解」という考え方に整理された。各学校では、組織的な取組を推進し、学習評価の信頼性や妥当性を高めてきた。また、過去の文部科学省の中央教育審議会「今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）」においても、附属学校園との更なる連携という点では、教材研究の指導等を行う中で、大学教員と附属学校園教員が連携して指導に当たる機会を積極的に取り入れることが必要であると述べられている。同時に、大学と附属学校園との連携の中で、教育実習における教育実習生の指導は、多忙な業務の中で両者が連携して指導を行うため、指導時間の不足や必

* 佐賀県立佐賀工業高等学校 ** 横浜国立大学教育学研究科 *** 宮崎大学教育学部
**** 宮崎大学教育学部附属幼稚園 ***** 滋賀県立瀬田工業高等学校 ***** 文部科学省

要な指導内容の明確化が十分になされていない現状がある。そのため、教育実習の現状としては、大学側と附属学校園側で異なる指導が行われることもあることも報告された¹⁾。そのような中で、南部らは、学習指導案作成の指導を含む教育実習の事前・事後に位置づく教育実習生の実践的能力を育成するための訓練プログラムを開発し、指導と評価の成果を挙げている²⁾。しかし、既存の研究においては、例えば、学習指導案に特化しシステム化している例³⁾はあるが、生活科を対象とした学習指導案作成の指導をシステム化する取り組みはこれまでのところ例を見ない。

そこで著者らは、前述した附属学校園と大学間との課題を解決するために、教育実習生の作成した学習指導案作成の指導法をシステム化することで、教育実習生の評価の一元化を目指すことを検討してきた⁴⁾。

本研究では、大学教員と附属学校教員の生活科における指導の観点等の統一を図ることを目的とし、教育実習生が正しく学習指導案を作成できるようにするために、学習指導案作成の評価チェック方法を提案するに至った。特に、指導案の評価の結果によって、後の訂正・修正の指導を改善し、改めて行なわれた指導の成果を再度評価するという考えに基づき指導と評価の一体化を具現化でき、円滑な指導が行えるようになることが、本評価チェック法の主な目的である。学習指導案を評価するにあたり、開発した評価チェック方法が記述の通り、的確に教育実習現場へ適応できるのかを確認した。そして、大学生が教育実習の際に作成した生活科学習指導案の指導・評価について、自己の学習を評価する能力を高めるために、他の学生が検証し、改善すべき点を点数化して容易に見出すことが可能であることが検証されたので、これについて報告する。

2 生活科指導案の評価チェック法⁵⁾⁶⁾

本研究で提案する評価チェック法は、先行研究として著者らが開発した中学校技術・家庭科(技術分野)の評価チェック法⁴⁾の一部を参考とし、小学校の低学年で開設されている生活科に対応する項目へと学習指導要領(平成20年)の内容を基に評価チェック項目や評価基準を挙げ、内容として盛り込んだ。本評価チェック法では、小学校に入学した段階で授業についていけない子ども及び、自分自身をコントロールできない子どもなど、小1プロブレムの問題等が発生している学校現場の深刻な課題を踏まえ、これらを配慮した上で、基本的な生活習慣やこれからの社会を生きていくために必要な力を小学校や中学校から身に付けさせる必要性があるための「題材の視点」及び「学習活動について」の評価項目を追加し、自分と社会・自然との関わりについて考えることができる内容であるか、安全面について考慮されているかという点についても評価チェックを行うようにしている。本評価チェック法では、評価ポイントを大きく4つに分け、評価ポイント①及び③は30点、評価ポイント②は20点の合計80点分の加算方式と評価ポイント④の20点からの減点法式を組み合わせた100点満点での採点方法とした。本評価チェック法を検証するためには、実際の教員養成課程の大学生が附属小学校において教育実習の際に作成した小学校生活科学習指導案を用いて、現職教員を含めた5%に評価チェック法を使った学習指導案の評価チェックの機能性の検証を行った。

図1は、評価ポイント①の「学習する題材は適切で、それに対する目標・設定理由は明確に

書かれている」に関するチェック項目を示す。評価チェック項目は、“○ 題材の適切さについて”、“○ 題材の目標について”及び、“○ 題材の視点について”の3点から構成する。“○ 題材の適切さについて”の評価チェック項目は、設定した題材が児童にとって適切かどうかということから、児童が興味・関心を持てるような題材である、児童の創造性が養われるような題材である、児童に技能を身に付けさせることができる題材である、児童の知識・理解が深まるような題材である、題材は年間の指導計画から考えられている及び、題材の指導計画は前後の題材と関連性がある、の各2点×6項目=合計12点とした。“○ 題材の目標について”は、題材に沿った目標で書かれてあるかを問うことで、書式が統一されている、押さえるべき評価の観点が押さえられた目標となっている、児童が本題材をしっかりと学習できるような学習目標となっている及び、学習指導要領に示された目標になっている、の各2点×4項目=合計8点とした。“○ 題材の視点について”は、生活科の教科目標の一つにもなっている自分と身近な人々、社会及び自然とのかかわりに関心をもち自分自身や自分の生活について考えさせるということから、本題材は、自分と人や社会とのかかわりについて考えられている、本題材で自分と自然とのかかわりについて考えることができる、本題材で自分自身について考えることができる、本題材で気付きを得ることができる及び、評価基準は抽象的でなく具体的に書かれているの各2点×5項目=合計10点とした。

- ① 学習する題材は適切で、それに対する目標・設定理由は明確に書かれている (30点)
 - ・題材の適切さについて..... (12点)
 - ・題材の目標について..... (8点)
 - ・題材の視点について..... (10点)

○ 題材の適切さについて (各2点×6=12点)

題材の適切さについて	チェック欄
児童が興味・関心を持てるような題材である	
児童の創造性が養われるような題材である	
児童に技能を身に付けさせることができる題材である	
児童の知識・理解が深まるような題材である	
題材は年間の指導計画から考えられている	
題材の指導計画は前後の題材と関連性がある	

○ 題材の目標について (各2点×4=8点)

題材の目標	チェック欄
書式が統一されている	
押さえるべき評価の観点が押さえられた目標となっている	
児童が本題材をしっかりと学習できるような学習目標となっている	
学習指導要領に示された目標となっている	

○ 題材の視点について (各2点×5=10点)

題材の視点	チェック欄
本題材は自分と人や社会とのかかわりについて考えられている	
本題材で自分と自然とのかかわりについて考えることができる	
本題材で自分自身について考えることができる	
本題材で気付きを得ることができる	
評価基準は抽象的でなく具体的に書かれている	

図1 評価ポイント①のチェック項目

図2は、評価ポイント②「児童の過去の経験などを把握し、現在の実態を認識できている」に関するチェック項目を示す。評価チェック項目は“○児童の実態について”及び、“○学習内容と生活との関連について”の2項目から構成する。“○児童の実態について”は、小1プロブレムなどの問題を抱える小学校低学年の児童の発達段階や経験などを把握しているかどうかについてのチェック項目とした。児童が本題材についてどのくらいの知識・理解があるかを認識できている、児童が本題材についてどのくらい興味・関心を持っているかを認識できている、児童が本題材に対してどのような思いを抱いているかを認識できている、児童の発達段階を認識できている、学級の特徴を認識できている、単元についての経験を把握している及び、児童の他教科での学習内容を把握している、の各2点×7項目＝合計14点とした。“学習内容と生活の関連について”は、日常生活と生活科が関連しているかについて、児童が日常生活の中で活用できる学習内容である、児童たちが日常生活と学習内容が関係していることが理解できる学習内容である及び、児童が実生活で実践することのできる内容である、の各2点×3項目＝合計6点とした。

② 児童の過去の経験などを把握し、現在の実態を認識できている (20点)

- ・児童の現在の実態について…………… (14点)
- ・学習内容と生活の関連について…………… (6点)

○児童の実態について (各2点×7＝14点)

現在の児童の実態	チェック欄
児童が本題材についてどのくらいの知識・理解があるかを認識できている	
児童が本題材についてどのくらい興味・関心を持っているかを認識できている	
児童が本題材に対してどのような思いを抱いているかを認識できている	
児童の発達段階を認識できている	
学級の特徴を認識できている	
単元についての経験を把握している	
児童の他教科での学習内容を把握している	

○学習内容と生活の関連について (各2点×3＝6点)

学習内容と生活の関連	チェック欄
児童が日常生活の中で活用できる学習内容である	
児童たちが日常生活と学習内容が関係していることが理解できる学習内容である	
児童が実生活で実践することのできる内容である	

図2 評価ポイント②のチェック項目

図3は、評価ポイント③「指導計画や本時の学習指導は、無理がなく具体的に考えられている」に関する評価チェック項目を示す。評価項目は、“○本時の学習指導過程について”，“○指導上の留意点について”及び、“○学習活動について”の4点で構成した。“○指導計画について”は、題材と児童と教師との関係について、題材から外れていないか、児童にとって無理な授業の展開になっていないか及び、教師と児童とのかかわりが明確に書かれているか、の各2点×3項目＝合計6点とした。“○本時の学習指導過程について”は、学習指導過程の全体を通し

た流れや学習ごとの関連についての児童の思考を妨げない流れになっている、目標が達成できる学習である、身に付けさせたいことが明確である、読むだけで1時間のおおまかな流れが予想できるものである及び、学習内容ごとのつながりがあるの各2点×5項目＝合計10点とした。“指導上の留意点について”は、指導過程での教師の指導上において、書式が統一されている、活動や実習の際には教師が必ず机間指導等を行うようになっている及び、指導過程ごとに留意点が設定されている、の各2点×3項目＝合計6点とした。“○学習活動について”は、児童に対する時間配分や安全面について、時間の配分は適切にされている、安全面について考慮されている、児童の活動しやすい場所や環境は考慮されている及び、児童に合わせた学習内容を展開している、の各2点×4項目＝合計8点とした。

- ③ 指導計画や本時の学習指導は、無理がなく具体的に考えられている (30点)
 - ・指導計画について..... (6点)
 - ・本時の学習指導過程について..... (10点)
 - ・指導上の留意点について..... (6点)
 - ・学習活動について..... (8点)

○指導計画について (各2点×3＝6点)

指導計画について	チェック欄
題材から外れていないか	
児童にとって無理な授業の展開になっていないか	
教師と児童とのかかわりが明確に書かれているか	

○本時の学習指導過程について (各2点×5＝10点)

本時の学習指導について	チェック欄
児童の思考を妨げない流れになっている	
目標が達成できる学習である	
身に付けさせたいことが明確である	
読むだけで1時間のおおまかな流れが予想できるものである	
学習内容ごとのつながりがある	

○指導上の留意点について (各2点×3＝6点)

指導上の留意点について	チェック欄
書式が統一されている 例：(児童が)～～できるように、(教師が)～～～～する。	
活動や実習の際には教師が必ず机間指導等を行うようになっている	
指導過程ごとに留意点が設定されている	

○学習活動について (各2点×4＝8点)

学習活動について	チェック欄
時間の配分は適切にされている	
安全面について考慮されている	
児童の活動しやすい場所や環境は考慮されている	
児童に合わせた学習内容を展開している	

図3 評価ポイント③のチェック項目

④ 指導案として誤りがなく、正しく書かれている (20点)

・誤字・脱字、語句の間違い、書き方の誤り、スペース・改行の誤りなどにつき

-(マイナス)1点----- (20点)

ページ	行数	間違いの内容

図4 評価ポイント④のチェック項目

図4は、評価ポイント④「指導案として誤りがなく、正しく書かれている」に関する評価チェック項目を示す。同図より、学習指導案の“誤字・脱字、語句の間違い”，書き方の誤り，“スペース・改行の誤り”について、評価を行う項目とした。評価ポイント全体は、学生の努力や工夫によって評価されるものが多く、意欲も引き出されると考えられる。このことから、加点方式をメインとしているが、評価ポイント④に関しては、第三者が読む指導案についてのものであり、将来教師として一人立ちしていくにあたり姿勢を育成することも目的の1つとするため、誤字・脱字などのない指導案をできるだけ確実に作成するため減点方式を取り入れている。

図5は、4つの評価ポイントの総合点をまとめる評価シートを示す。同図より、評価チェックポイント①～③は、チェック数×2点であり、評価ポイント④は、減点方式を用いた。そのため、基本点数20点から-(間違いの数×1点)として評価している。最終的には、全ての点数を合計したものを合計点数とし100点満点の総合点としている。

最終評価 (100点満点中)

評価ポイント	○の数		点数
①		×2	/30
②		×2	/20
③		×2	/30
	間違いの数		
④		×-1	/20
合計			/100

※④は、「20+(間違いの数×-1点)」で点数を求める

図5 評価ポイントのチェック項目

3 評価チェック法における採点結果及び考察

本評価チェック法を検証するために、宮崎大学教育学部学校教育課程初等教育コースに所属する3学年の学生が附属小学校での教育実習の際に作成した生活科の学習指導案をサンプルとして、評価チェック法を用いて採点を試みた。

図6は、実際に教育実習の際に作成された生活科の学習指導案の目標、指導観及び指導計画である。同図より、評価ポイント①の「学習する題材は適切で、それに対する目標・設定理由は明確に書かれている」及び評価ポイント②の「児童の過去の経験などを把握し、現在の実態を認識できている」について評価をした。同図の指導観の項目である“実生活での実践”の箇所（進んで地域や行事にかかわろうという思いを育む）では、評価ポイント②の○学習内容と生活の関連についての項目と一致する。一般的に、日常生活の中で地域の行事に関わることはあるが、あくまでも一消費者の立場の方が多く、商品を提供する側として実践を行うことは難しい。また同様に、指導観の項目である“生徒の経験”の箇所（昨年度の2年生が計画、準備した「わっしょい！元気まつり」にお客さんとして参加し、祭りの楽しさや様々な人々とかかわる楽しさを味わってきた。）及び“理解について”の箇所（祭りにかかわった人々がどんな思いや願いをもっていたのかについては、十分に理解している子どもは少ない。）は、評価ポイント②の児童の実態についてと関連しており、十分に児童の経験や学級の特徴を掴んで記述されている。“発達段階について”及び“他教科との関わり”は、評価ポイント②の児童の実態と関連しており、変化していく児童の発達段階について及び他教科での学習内容の把握が行えていない。また、指導案の中で使われている「わっしょい！元気まつり」という言葉の漢字を統一する必要があるため、指導計画の中で評価ポイント④「指導案として誤りがなく、正しく書かれている」における指摘がされている。

第2学年生活科学学習指導案

- 1 単元 わっしょい!元氣まつり
- 2 目標
 - 地域の祭りや行事に関心をもち、みんなと協力して、楽しい自分たちの祭りを計画しようとする。
 - 自分の思いや願いをもとに、みんなと協力しながら、相手に伝わるように工夫して表現することができる。
 - 準備をしたり、活動したり、ふりがえったりするなかで、自分や友達の成長に気付くことができる。
- 3 指導案
 - 本単元は、自分たちの思いを生かした楽しい祭りを計画し実施する活動をとらして、祭りは地域の人々の思いや願いが込められており、地域の人々の協力のもとに成り立っていることに気づき、これから進んで地域や行事にかかわろうという思いをもつことを主なねらいとしている。
 子どもは、人とかかわり合いの場が家から学校、地域へと次第に広がっていく。しかし、近年の都市化に伴い、地域の人々とかかわり合いが希薄化し、祭りなどの地域の行事に参加する機会や身近な人々とかかわり合う大切さを実感する機会が少なくなっている。
 そこで、実際は、自分たちの思いや願いを生かした祭りを計画し、実施することは、自分たちで祭りを実施する達成感や楽しさを実感できるだけでなく、祭りなどの地域の行事には、人々の思いや願いが込められており、地域の人々の協力のもとに成り立っていることに気付くことができる。また、これから進んで「地域や行事にかかわろう」という思いを奮い立てて意義がある。
(実生活での実践)
 - これまでに子どもは、昨年度の2年生が計画、準備した「わっしょい!元氣まつり」にお客さんとして参加し、祭りの楽しさや様々な人々とかかわる楽しさを味わってきた。しかし、祭りにかかわった人々がどんな思いや願いをもっていたのかについては、十分に理解している子どもは少ない。
(生徒の経験)
 本学級の子どもは、明るく元気で活動的である。生活科の学習においては、意欲的に取り組み、進んで活動したり、自分の意見を伝えようとしていたりする姿が見られる。しかし、表現したことを友達と交流し合ったり、気づきを高め合うまでには至っておらず、今後の指導によるところが大きい。
(理解について)
(友達段階にたいして)
(他教科の関わり)
 - 本学級では、子どもが祭りの計画から準備、実施に至るまでの過程を経験することで、祭りなどの地域行事にも、人々の思いや願いが込められているということに気づき、地域に対して関心をもちたり、友達と協力して成長を遂げることで達成感を味わい、互いのよさや成長に気付いたりすることができるような単元構築を目指す。
 まず、導入の段階では、祭りのVTRや写真を視聴し、どんな祭りにするか問うことで、祭りに対する興味・関心を高め、今後の活動への意欲付けを図ることができるようにする。
 展開の段階では、工夫の不足しているお店や品物(商品)を提示することで、自分たちができる工夫について、子どもが主体的に考え、話し合いや準備に積極的に取り組むことができるようにする。
 最後に終末の段階では、保護者や幼稚園児などを招待し、「わっしょい!元氣まつり」を行う。祭りでの活動やお客さんの様子を撮影した写真や動画を提示し、活動のふりがえりを行うことで、活動のよさや自分や友達の成長に気付くことができるようにする。
(身につかせ)
(手ここと)
- 4 指導計画(全17時間)

(1) 祭りのVTRや写真を視聴し、自分たちの祭りについて話し合う	1時間
(2) 祭りの準備に必要なことを話し合う	2時間
(3) 「かがやけ!2の3」出店の準備をする	5時間
・ 出店の品物や商品の準備	4時間
・ 「かがやけ!2の3」ちよこっと出店	1時間(本時)
(4) 「かがやけ!2の3」お神輿などの準備をする	4時間
(5) 「わっしょい!元氣まつり」の準備をする	1時間
(6) 保護者や幼稚園児、1年生などを招待して、わっしょい!元氣まつりを行う	3時間
(7) これまでの活動をふりかえる	1時間

図6 学習指導案採点例①

図7は、実際に教育実習の際に作成された生活科の学習指導案の本時の目標、指導過程及び本時の評価基準である。評価ポイント③での「指導計画や本時の学習指導は、無理がなく具体的に考えられている」について評価した。同図より、指導過程の中の指導上の留意点の欄にある「環境づくり」は、評価ポイント③の○学習活動についてと関連する。ここでは、長机を使用することで、生徒の学習しやすい環境が作られている。同様に、「教師とのかかわり」は同じく評価ポイント③の○指導計画についてと関連する。また、学習活動及び学習内容と指導上

- 5 本時の目標
 ○ 1年生や幼稚園生が喜ぶような、店構えや品物（商品）の並べ方を考えることができる。
- 6 指導過程

学習活動及び学習内容	指導上の留意点	資料・準備
<p>(1) 本時の学習について話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 店構えや品物（商品）の並べ方について、見て感じたことを話し合う。 ○ 本時のめあて 1年生や幼稚園生がよるこぶような、店がまえやしなもの（しょうひん）のならべ方を考えよう。 <p>(2) 本時の学習の見通しをもつ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 時間や学習の流れ、学習形態の確認 <ul style="list-style-type: none"> ・ 11:00 ちょこっと出店 ・ 11:10 お客様カードをもとに話し合い ・ 11:20 ふりかえり ・ 11:25 片づけ <p>(3) 「かばやけ! 2のちょこっと出店」を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ ちょこっと出店の準備をする。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 看板を設置する。 ・ 品物（商品）を並べる。 ○ ちょこっと出店を行い、各グループのよを見つめる。 <p>(4) 各グループのよさや改善点について話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ よかった点、工夫してあった点 ○ もっとよくなる点 <p>(5) 本時学習についてふりかえり、次時への見通しをもつ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 本時学習のふりかえり ○ 次時の学習への見通し 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「わっしょい! 元気まつり」で使用する長机を各グループに用意すること、店構えや品物（商品）の並べ方を考えることへの関心を高めることができるようにする。 ○ 工夫が不足している店構えや品物（商品）の並べ方を提示することで、めあてを考えることができるようにする。 ○ 時間や学習の流れ、学習形態の確認をすることで、見通しをもって活動できるようにする。 ○ 各グループを見回る際には、工夫した点やそのわけをたずね、賞賛するなどで製作への意欲を高め、より思いや願いをもち活動できるようにする。 ○ 友達（= お客さんとして店構えや品物（商品）の並べ方について、よいところを見つけてもらう機会（お客様カード）を設けることで、お客さんの意見をもとにした工夫を考えることができるようにする。 ○ お客様カードをもとに、全体に紹介することで、自分のグループや他のグループの工夫のよさを共有できるようにする。 ○ お客様カードをもとに、新には課題について話し合うことで、当日の見通しをもつことができるようにする。 	<p>長机 球 商品 お客様カード</p>

- 7 本時の評価規準
- 1年生や幼稚園生が喜ぶように、お客様カードをもとに店構えや品物（商品）の並べ方を工夫している。
 (見守・実現)【観察・発表】

図7 学習指導案採点例②

の留意点の書き方に誤りがあったため、評価ポイント④「指導案として誤りがなく、正しく書かれている」について、1箇所の指摘がなされた。

図8は、評価ポイント①の採点例を示す。同図より、評価ポイント①は20点満点中の14点という採点結果だった。採点の詳細は、全体的には、○題材の目標についてしっかりと評価の観点を押さえられており、自分と社会とのかかわりについて考えられる内容になっている。ここでは、評価ポイント①の○題材の適切さについての「児童の創造性が養われるような題材である」及び「児童に技能を身に付けさせることができる題材である」への評価がなされてい

い。この授業では、自分と友達の成長に気付きお互いに高めあうというものになっているため、学習指導案内に記述されていない。同様に、○題材の視点については、「本題材で自分と自然とのかかわりについて考えることができる」という旨の内容が、学習指導案内に記述されていない点も指摘される。本学習指導要領の内容が、祭りという地域の行事について取り上げられた授業であるため、自然とのかかわりについては、全く触れられていない。

- ① 学習する題材は適切で、それに対する目標・設定理由は明確に書かれている（30点）
- ・題材の適切さについて-----（12点）
 - ・題材の目標について-----（8点）
 - ・題材の視点について-----（10点）

○題材の適切さについて（各2点×6＝12点）

題材の適切さについて	チェック欄
児童が興味・関心を持てるような題材である	○
児童の創造性が養われるような題材である	
児童に技能を身に付けさせることができる題材である	
児童の知識・理解が深まるような題材である	○
題材は年間の指導計画から考えられている	○
題材の指導計画は前後の題材と関連性がある	

○題材の目標について（各2点×4＝8点）

題材の目標	チェック欄
書式が統一されている	○
押さえるべき評価の視点が押さえられた目標となっている	○
児童が本題材をしっかりと学習できるような学習目標となっている	○
学習指導要領に示された目標になっている	○

○題材の視点について（各2点×5＝10点）

題材の視点	チェック欄
本題材は自分と人や社会とのかかわりについて考えられている	○
本題材で自分と自然とのかかわりについて考えることができる	
本題材で自分自身について考えることができる	○
本題材で気付きを得ることができる	○
評価基準は抽象的でなく具体的に書かれている	○

図8 評価ポイント①の採点例

- ② 児童の過去の経験などを把握し、現在の実態を認識できている（20点）
- ・ 児童の現在の実態について……………（14点）
 - ・ 学習内容と生活の関連について……………（6点）

○児童の実態について（各2点×7＝14点）

現在の児童の実態	チェック欄
児童が本題材についてどのくらいの知識・理解があるかを認識できている	<input type="radio"/>
児童が本題材についてどのくらい興味・関心を持っているかを認識できている	<input type="radio"/>
児童が本題材に対してどのような思いを抱いているかを認識できている	<input type="radio"/>
児童の発達段階を認識できている	
学級の特徴を認識できている	<input type="radio"/>
単元についての経験を把握している	<input type="radio"/>
児童の他教科での学習内容を把握している	

○学習内容と生活の関連について（各2点×3＝6点）

学習内容と生活の関連	チェック欄
児童が日常生活の中で活用できる学習内容である	<input type="radio"/>
児童たちが日常生活と学習内容が関係していることが理解できる学習内容である	<input type="radio"/>
児童が実生活で実践することのできる内容である	

図9 評価ポイント②の採点例

図9は、評価ポイント②の採点例を示す。同図より、評価ポイント②は、20点満点中14点という採点結果である。全体的な評価としては、児童がどのくらい知識・理解や興味・関心、これまでの経験についてしっかりと把握できているという点が重視される。ここでは、評価ポイント②の○児童の実態についての「児童の発達段階を認識できている」及び「児童の他教科での学習内容を把握している」への評価がされていない。図7で指摘を述べたが、変化していく児童の発達段階についてと他教科での学習内容の把握が行えていないために、このような評価になっているものと思われる。同評価ポイントの学習内容の生活の関連についての「児童が実生活で実践することのできる内容である」への評価もなされていない。同様に、図7で述べたように、日常生活の中で地域の行事に関わることはあるが、あくまでも消費者の立場のほうが多く、商品を提供する側として実践を行うことは難しいために、このような評価になっているものと思われる。

図10は、評価ポイント③の採点例を示す。評価ポイント③は、30点満点中28点という採点だった。指導計画は無理なく設計されており、一読するだけで大まかな授業の流れが把握できるものである。また、指導過程ごとにしっかりと留意点があり、時間配分も適切に行われている。唯一減点となっているのが評価ポイント③の○学習活動についての「安全面について考慮されている」という点である。この授業では、はさみやカッターといった刃物や機械を使うといった作業がなく、机を使う場面等でも安全面については問題がない。そのため、評価するには至らないという結果になっているものと考えられる。

③ 指導計画や本時の学習指導は、無理がなく具体的に考えられている (30点)

- ・指導計画について…………… (6点)
- ・本時の学習指導過程について…………… (10点)
- ・指導上の留意点について…………… (6点)
- ・学習活動について…………… (8点)

○指導計画について (各2点×3=6点)

指導計画について	チェック欄
題材から外れていないか	○
児童にとって無理な授業の展開になっていないか	○
教師と児童とのかかわりが明確に書かれているか	○

○本時の学習指導過程について (各2点×5=10点)

本時の学習指導について	チェック欄
児童の思考を妨げない流れになっている	○
目標が達成できる学習である	○
身に付けさせたいことが明確である	○
読むだけで1時間のおおまかな流れが予想できるものである	○
学習内容ごとのつながりがある	○

○指導上の留意点について (各2点×3=6点)

指導上の留意点について	チェック欄
書式が統一されている 例：(児童が)~~~できるように、(教師が)~~~~~する。	○
活動や実習の際には教師が必ず机間指導等を行うようになっている	○
指導過程ごとに留意点が設定されている	○

○学習活動について (各2点×4=8点)

学習活動について	チェック欄
時間の配分は適切にされている	○
安全面について考慮されている	○
児童の活動しやすい場所や環境は考慮されている	○
児童に合わせた学習内容を展開している	○

図10 評価ポイント③の採点例

図11は、評価ポイント④の採点例を示す。同図より、評価チェックでは、減点方式を用いており、20点満点中の間違いが3箇所であることで、17点の採点結果となった。間違った箇所の内容としては、「本単元」や「まつり」といった言葉を統一して使用することに対して指

- ④ 指導案として誤りがなく、正しく書かれている (20点)
 ・誤字・脱字、語句の間違い、書き方の誤り、スペース・改行の誤りなどにつき
 - (マイナス)1点----- (20点)

ページ	行数	間違いの内容
1.	26	本活動 → 本單元.
1	44	祭り → 「まつり」へ統一
2	35	留意点の丸の位置が下げる.

図 1 1 評価ポイント④の採点例

最終評価 (100点満点中)

評価ポイント	○の数		点数
①	11	× 2	22 / 30
②	7	× 2	14 / 20
③	14	× 2	28 / 30
	間違いの数		
④	3	× -1	17 / 20
合計			81 / 100

※④は、「20 + (間違いの数 × -1点)」で点数を求める

図 1 2 最終評価の例

摘点がある。同様に、指導過程の中にある指導上の留意点が左欄にある学習活動及び学習内容と並んで記載されていないため、減点を指摘された箇所となる。

図 12 は、評価ポイント全ての点数を合計する最終評価を示す。同図より、この学習指導案の評価ポイント①及び評価ポイント②では、題材の目標や視点について学習内容と生活との関連については概ね書かれている。だが、現在の児童の発達段階や他教科での学習内容の把握が十分にできておらず、児童の創造性を養ったり、技能を身に付けさせたりする点については、不十分である評価結果となった。評価ポイント③では、指導計画や指導過程及び指導上の留意点についてしっかりと記述されている。

4 むすび

本稿では、大学生が学習指導案を作成する際に、正しく作成できていない点を可視化でき、全体的な完成度を点数化することを目的とした評価チェック方法を提案・開発した。実際に教育実習生の作成した指導案について検証を行った結果、評価チェック法が正しく機能し、学習指導案を適切に評価・点数化できることが明らかとなり、本評価チェック法の信頼性について検証することができた。この評価チェック法の評価基準を明確化することにより、附属学校園での教育実習における実習生の学習指導案作成の指導を円滑に行うことが可能となることが予測される。更には、大学教員と附属学校園教員間での学習指導案の評価における意思の疎通及び連携した指導も容易に行われる可能性がある。しかし、本評価方法の妥当性については、今回の検証において、安全面に関して十分考慮されていて当然のため、加点対象ではなく、減点対象の方がふさわしいのではないかとの指摘もあり、これを含めた今後の更なる検証が求められるものとする。

今後は、多くの小学校生活科の学習指導案において、本報告で開発した評価チェック法を適用し、この方策の評価基準を明確にすること、評価チェック項目の改善を図ること、評価者が変わっても学習指導案の採点・評価に大きな差異が生じないようにチェック項目に改善することを検討していく。

参考文献

- 1) 中央教育審議会：「今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）」、II-1-(2) (2006)
- 2) 南部昌敏・小金井正己・井上光洋・児島邦宏：「教育実習改善の方策と課題（1）」、日本教育学会大会研究発表要項、第42号、p.52 (1983)
- 3) 南部昌敏・中野靖夫：「教育実習事前事後訓練プログラムの開発（第II報）」、上越教育大学研究紀要 第1分冊、Vol.7、No.1、pp.41-52 (1988)
- 4) 湯地敏史・玉井恭平・岩切勇樹・山田哲也・岳野公人：「技術科学習指導案における評価チェック方法の開発」、日本産業技術教育学会 技術科教育の研究、第20巻、pp.67-72 (2015)
- 5) 文部科学省：小学校学習指導要領解説 生活編、日本文教出版 (2008)
- 6) 国立教育政策研究所 教育課程研究センター：評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料 (小学校 生活)、教育出版 (2012)

付記

最後に、本論文の内容は、2016年6月3日(土)に行われた日本生活科・総合的学習教育学会第25回全国大会(宮城県)において、湯地敏史・藤元嘉安・岡村好美・玉井恭平・岳野公人：「生活科の学習指導案における評価チェック法の提案」、No.15-27、C608、講演要旨集P.210において発表した内容を十分に精査しまとめたものである。